



第百二十號 (第十一卷) 昭和六年四月

天文語委員會を常設せよ

(卷 頭 言)

我が國の天文用語がまちまちである。(尤も、天文用語の混亂は、他の學科ほどひどくは無い。物理や化學、其の他の諸學科に於いて、學俗間に用ゐられる術語の不統一は言語同斷である！ 其れに比べると、天文用語などは、まだまだ比較的良く一致してゐる方だ。) 之れは、なるべく統一した方が好い。此の事は我々多年の希望であつて、既に「天界」第十二號第249頁にも書かれてある。又、此の希望については、社會一般に、一人も不賛成者は有るまいと思ふ、

要は、其の統一の方法と制度と機會とである。ごく一部の人が簡単に意見を纏めて了つて、之れを一般者に押しつけることは最もいけない。所謂官僚的な行き方は最もつゝしまねばならない。理學の専門家と、邦文記述の實際家と、國語漢語學者と、西洋語學者と、文學家と、心理學者と、是非此等の人々を含む特別委員會によつて、用語の研究と撰定とを行はなければならない。しかも、學術の進歩發達と共に、日々新しい用語が増すのであるから、此の種の委員會は、全く、常設的のものとするが好い。そして、少なくとも一年に一度ぐらゐる會合して、仕事をして貰ひたい。

此の種の委員會は、充分に、常識と寛量と權威とを持つものでなければならぬ。始めから作られた私案を、頑強に主張するやうなことがあつて

はならない。又、一旦、撰定され統一された天文用語も、之れを一般に強制的に使用せしめる權力を此の種の委員會は持つてゐるのでないから、むしろ諸人が此の委員會の決議に眞心から心服するやうな權威者の集りであり、又、行動でなければならぬ。従つて最も純眞な、第一義的な、本格的な權威が要求せられる。只の官位勳等學歴系閥等は、かうした仕事には決して眞の權威とならないこと、言ふまでもない。こういふ意味から考へると、學士院の諸老や、學術研究會議の諸賢にのみ此の問題を委せるのは賛成しかねる。むしろ、本會や、天文學會のやうなものが主催し、社會の各方面から適當な人士を招いて、委員會を組織するのが好いと思はれる。

「天文用語の撰定」といふことは、決して學術の研究そのものでは無い、此の點は、學究者がとかく誤る所であるから、特別な注意が要る、用語の撰定は其れ自體が藝術であり、創作であることを忘れてはならない。故に委員は、學究の故に非ず、經歷の故に非ず、むしろ、完全な「人」としての立場に立つて仕事をしなければならない。或る場合には、特別な調査や研究も必要であらう。決して無理に急いではならない。そして多數決などに據らず、少數意見の中にも光を見出すだけの雅量が無ければならぬ。

かうした委員會が一日も早く組織されんことを望む。

水 星 と 彗 星

花山の方々の間では、水星と彗星とのアクセントをどう御區別になつてゐますか？ 妙な御尋ねですが、小生はどちらも平らに發音してゐます爲め放送や談話の時に度々不便を感じて、後者を「彗星」といつたりしてゐます。念の爲め先頃東京天文臺の某氏に何つて貰つたのですが、矢張り區別は無いといふ事でした。もし花山で區別されてゐるのでしたら、「天界」を通じて御發表下さることも全國的に有意義かと思ひます。愚考では水星は金星、火星、木星などと同斷平らに發音して、彗星は Sūisei の如く第一綴を強めたら如何と思ひます、或は既にそう言つておゐるのでは無いでせうか？（關西ではアクセントが初めにある事が多いと言ひますから）

尤もプロパーネムが冠せられる時はこれにより影響される事になりせうが、その節は混同の誤の無い事は申す迄ありません、

以上トリヴェイアルな事です、實際上の不便から御一定を願ふ譯です。（抱影）